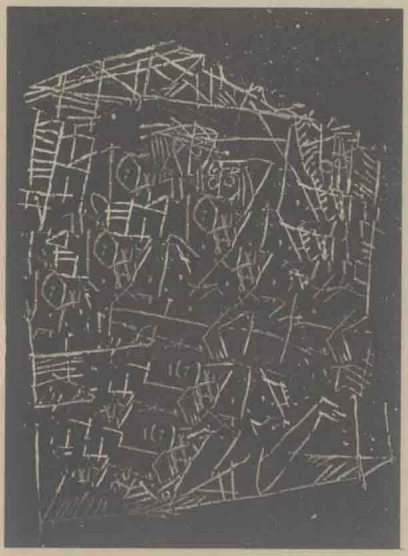
骨の火

森内俊雄

文藝春秋

骨の火



森内俊雄

文藝春秋

■著者略歴
昭和11年12月12日，大阪に生まれる。
早稲田大学文学部露文科を昭和35年に卒業。
代表作に『幼き者は驢馬に乗って』（文藝春秋）『骨川に行く』（新潮社）『翔ぶ影』（角川書店）『ノアの忘れもの』（文藝春秋）『マ ラナ・タ終篇』（文藝春秋）など。

骨の火

昭和六十一年四月十五日　第一刷

定価　一五〇〇円

著者　森内俊雄

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一
郵便番号一〇二

本文印刷　大日本印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© Toshio Moriuchi 1986　Printed in Japan

骨の火

私の心には、燃えあがる火があり、私の骨の中に
閉じこめられていた。私はそれを消そうとつとめ
たが、消せなかった。　　エレミヤ書XX9

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

金魚の大群が、軀のまわりを渦巻きながら泳いでいる。色鮮かな金魚は四、五百尾もいるだろうか。そんなにも沢山群がっていては、酸素が欠乏するはずなのに、その気配は金魚に見えない。どれも握り拳ほどの大きさで肥え太っている。木苺か、何か悪性の腫瘍を思わせる瘤を持ったランチュウ、背びれがないこの種類に似ているが、開き尾が長く伸びているオランダシシガシラ、やはり瘤があり、赤い体色と黒い尾ひれを持つハナフサ、鱗が真珠のように光っているパールスケール、頬が葡萄のようにふくれているスイホウガン、白色のジキン、タンチョウ、それからリュウキン、ワキン、アカデメキンにクロデメキンもいる。金魚の群れが、時折、軀に触れ、次第に息苦しくなってきた。手に捕えた金魚を何尾か握りつぶすと、空気を吸いに水面へ浮き上って行った。

漆山陽三が眼を醒ますと、そこは客間で、彼はソファ・クッションを二つ重ねて、昼寝をしていたのだった。夢であったことを知りながらも、金魚を握りつぶした右手を鼻先へ持っていくと、嘔気を催す生臭い幻臭があった。時計を見ると、午後二時だった。季節は、さわやかな五月だったが表は曇り、蒸し暑かった。不安感が、冷たいナマコとなって、みぞおちのあたりでうごめき出した。家の中は、しんと静まりかえっている。駅前通りから離れ、近くにバス停もなければ、往来する車の音もない。

「おい、豊美」

漆山は、妻の名前を二度ばかり呼んだが、返事はない。隣室へ行き、エクステンション・テーブルの上を見ると、伝言が置いてある。

〝ピアノの練習に行きます。心配しないで〟

とあって、電話番号を記していた。豊美は、車で出かけているはずだから、電話をかければ、十分で帰ってくるだろう。行き先は分っていた。いま、漆山を一人きりにする危険を知っているはずなのに、妻は外出している。だが、心のうちで不満を呟き、なじる気力もない。彼は、豊美に、永らく、重い心の負担をかけてきた。ひとり残されているとあぶない自分の精神状態への不安はぬぐい難かったが、妻を責めることは出来ない。漆山の観察力は鈍っていても、ここのところ、年齢のせいではない容色の衰えを見てとっていた。性来の快活さも、つくろってはいるが、失われつつある。それは、彼のせいだった。

口が粘り、渇きを覚えている。漆山は台所へ行くと、冷凍庫をあけて、一リットル入りのラム・レーズンのアイスクリームを出してきた。甘党ではない彼が甘さに餓え、容器をかかえこみ、震える手でスプーンをあやつって、子供のようにむさぼりはじめた。ここ、わずか八カ月ばかりの間に体重は十五キロも増えていた。運動もしないのに、食欲は異常に旺盛である。漆山は、台所で立ったままアイスクリームを舐めつづけた。口、顎のまわりを、べとべとに汚しながら舐めている。際限がない餓えだった。そんな自分がみじめで泣きたい感じだが、手はとまらない。妻の豊美がいれば、容器を取りあげるところだが、彼女はいない。

容器があらかた半分になってしまったところで、スプーンを流しに捨て、大量の水を飲んだ。その水の味は、金魚の大群が泳いでいた夢の水の味に似ている。生臭く、酸欠の水で、普段、人がその有難さを忘れている大事な命の糧とは思えない。水、という言葉に対して、理屈抜きに清冽な連想を抱くことのない人の心は枯れている。たとえ、まずい水道の水にしても、そのほとばしりに手をさらして、心躍ることなく、飲んで、甦りの感覚が味わえないのは、病んでいる徴だろう、と漆山は考える。漆山は、この国で数少ないカトリック信者のひとりだった。妻の豊美、大学三年で、電子工学を専攻している長男の直邦、来年、大学受験をひかえている高校生の次男、逸朗も受洗している。聖書に読み親しんできた漆山にとって、水は特別な意味を持っていた。洗礼の水の予表として、ノアの洪水による救い、「出エジプト記」の海わたりをはじめ、旧約、新約聖書ともにその言葉は聖性を荷っている。だが、その水は、いまや腐っている。彼の体液のよ

うに濁って粘り、臭う。

漆山は再び客間へ戻ると、ソファの上で横になった。玄関のドアに妻が鍵をかけて出ているのは分っていたが、留守居のつもりでいて、安楽なベッドのある二階へは上がる気になれなかった。汚れて湿っぽい下着のような眠気が、いわれのない不安とともにまだ靄か霧に似て漂っている。テレビを観る気はない。新聞、週刊誌、本も読みたくはない。レコードを聴くゆとりもない。彼は昼食を摂ってから間がなく、いまアイスクリームを大量に食べたばかりなのに、夕食のことを考えはじめた。薄気味悪く、狂い出しそうな不安の軟体動物をなだめるつもりでもあった。スペア・リブとマッシュド・ポテト、パンはバゲット、それにオオバの千切りを香料として散らした鶏骨のスープ、食後にはキウィ・フルーツ。でなければ、鷹の爪をそのまま放りこんだ挽き肉カレーとライス、スープもこれまた汗が噴き出るばかりに辛い鷹の爪とニンニク、トマトを煮つぶして、色付けにパプリカを入れたもの。食後にはバニラのアイスクリームにグラン・マルニエ、いや、口に涼しいペパーミントをたらしたのがいいかな。それに、うんと濃いコーヒー。酒好きでいながら、飲酒の欲求は相変わらず湧いてこない。

漆山陽三は、自分がいやしくなってしまっていると気付いていても、抑制にいたるほど強い反省力はない。精神が、その人の現実をつくる。現在、彼が感知し得るところの現実は卑小で、色褪せ、死に瀕している。しかし、それでいながら、それは陰惨な威力を持って迫ってきている。それも恐怖の表情のかわりに、彼を嘲笑し踏みにじることの勝利を、不様な肥満と、輪郭が曖昧

に崩れてむくみながら、薬が作りだした安穏な生活に満足しきった顔の形に変えることで、教え示していた。

彼は、両手をかざしてみた。向精神薬を長期にわたって服用すると現われてくる手指の震えは、それを抑えるアキネトンという錠剤を、一日、三錠、服用しているにもかかわらず、止まらない。症状を訴えて、処方してもらった薬を嚥みはじめた最初の三、四日はおさまったが、いまでは、効果は消失している。こんな手で、何と戦うことが出来ようか。彼の人生は、すでに半ばを過ぎていた。生の終わりと、その先に到るための成熟の準備はとどこおり、よどんでいる。「石も、道の一部である」と言ったのはルネ・バザンであるが、心の病いは石ではなく、彼の足を捕える泥濘だった。漆山陽三は、自分が住んでいる小木津町の家から速足で歩いて、二十分の距離にある区役所第一出張所の所長であるが、昨年の九月から休職している。もう八カ月になる。

病人は睡り金魚はひるがへり　　岡本武三

漆山はいつか読んだ俳句を思い出し、松藻が漂うように、さきほどの夢に戻っていった。夢の中で、最後に握りつぶしたランチュウは、身もだえながら口から吐く泡の呟きで、死ネ、死ネ、死ネ、と囁いた。

彼がいま一日に服用している薬の量は、病んでいながら恐れずにはいられないほど多かった。手の震えを抑えるアキネトンのほかに、メジャーのトランキライザー、ヒルナミン5mg三錠、同じく不安を抑えるピレチア25mg一錠と0.4mgのソラナクス二錠、抗鬱剤のアナフラニール25mg一錠、

それにこれも薬の副作用による排尿困難を解くウプレチド5mg一錠、以上に加えて代謝機能を活発にさせるための、B_1、B_2、B_6のビタミン剤。これだけの薬が一日の薬の総量ではない。一回分である。これを、朝、昼、夜、三回嚥む。更に就寝前、ヒルナミン25mgとピレチア25mgを各一錠、マイナーのトランキライザー、ホリゾン5mg二錠、ソラナクス一錠、催眠薬のベンザリン5mg二錠を服用する。

このほかに、不安状態に陥ったときには随時、マイナーのトランキライザー、ホリゾンを嚥むように指示されていた。重ねて、まだ服用しなくてはならない薬があった。漆山には、喘息の持病がある。発作予防のザジテンを朝夕一カプセルずつ、気管支拡張と喀痰をうながすネオフィリン、ビソルボン、ホクナリンを一日三回、就寝前にネオフィリンのみ一錠嚥む。錠剤、カプセルの類いは識別を助けるために色とりどりであるが、量の多さもさることながら、色彩の多様さが神経にこたえる。漆山は検査をして、薬のせいで数値が高くなった肝機能の障害を恐れていた。また、腎臓が風化した消しゴムのようになり、骨がぼろぼろに崩れる日がくるのではないか、という妄想に捕われていた。彼には正確な医学知識がない上に、問いただす勇気を持たないまま、将来、自分を待ち構えているのは肝硬変による死か、喘息から肺気腫にいたっての呼吸不全による死だと考えていた。それも、鬱病による自殺衝動の魔手からまぬがれてのことである。この心の病いは、寛解しても再発を繰り返しやすい。

漆山は、初めてヒルナミンを嚥んだときの反応が忘れられなかった。鬱病がまだ軽い状態で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

不眠に悩まされていたころのことだった。催眠薬が効かず、量が増える一方だった。抗鬱剤を嚥みながら役所に出ていたが、夜、眠れなくて困っていた。ただの不眠症でも苦しいものだが、鬱状態にあって、夜ひとり眼を醒ましている時間の重さに耐えるのは難しかった。ベンザリンとホリゾンを二時間か、三時間の間隔で嚥んだ。それでも眠れぬままに朝となり、欠勤の電話を妻にかけさせておいて、また嚥んだ。しかも、それは非常用として与えられていた古典的睡眠薬ブロバリン0.4mgとイソミタール0.1mgの散薬で、服用量は一回分の倍量だった。すると、妙なことに、眼も頭も冴えてきた。嘔気はなかった。気分も悪くない。だが、何かおかしいと感じていた。本能は、賢明だった。このままでは、命が危ないという信号を送って寄越しているのが分った。漆山は妻の豊美に声をかけ、救急車を呼んでくれと言った。意識が無くなったのは、その直後だった。

そんなことがあって、担当の医師が就寝前にヒルナミン25mgを服用するように指示し、薬をもらって帰った夜、ベンザリンを二錠だけにして、併せて嚥んだ。効果は、劇的だった。ものの十分もたたぬうちに、抗し難い睡魔が訪れてきた。漆山は前後不覚のうちに眠ってしまったが、翌朝は惨憺たる状態になった。眼を醒ましたものの目蓋が、よく開かない。気分はそんなにも悪くなかったが、手足は抜けるようにだるい。起き上がろうとするが力がはいらない。必死の思いで、なんとか立ち上がり、階段を降りようとすると、ずるずると滑り落ち、へたばってしまった。妻の豊美が驚いて病院に電話をかけた。医師の説明によれば、薬の働きに個人差があることと、そ

の状態は、二、三日服用を続ければ治まり、睡眠を助ける作用と精神安定の働きだけが残るようになるということだった。そして、事実、そのようになったが、最初の日、宿酔状態と脱力感は夕刻まで続いた。漆山はおそろしい薬があるものだと思った。

しかし、そのヒルナミンを抗不安剤として日中にも使うようになりはじめたとき、服用量は5mg一回一錠で、朝、昼、晩三回嚥むと、強い眠気が終日続いた。だが、これも慣れた。眠気は完全に消えはしなかったが、弱まった。ただ、口渇感、舌のもつれが出る。食欲昂進と、甘味に餓えるようになったのは、それからだった。そのうち一錠が三錠となった。今では一日70mgも嚥んでいる勘定になる。このヒルナミンという薬は、たしかに不安を抑えてくれるが、それは人を痴呆化させて結果的に情緒不安定を抑制させるのだという事実に、遅まきながら気付いた。もっとも、気付いたところで止められない。しかも今、服用を忠実に守っていて、なお居たたまれない不安感がつのってきている。

漆山は、ホリゾンを一錠嚥んだ。そうしておいて、客間の電話機を見つめていた。豊美を呼び返すか、救急車を呼んで病院へ行こうか。

金魚手向けん肉屋の鉤に彼奴を吊り

切迫しながら、まだ、金魚にこだわっている。これは中村草田男の句だ。

金魚浮き時を吸いては泡を吐く

西東三鬼の句である。　不眠症魚は遠い海にゐる　という句もあったな。漆山は気をそらそう

としていた。このところヒルナミンのせいか記憶力が衰え、昨日の自分が一日何をしたかも思い出せないのに、どうしてこんなふうに、すらすらと句が出てくるのだろう。

不安感に襲われたとき、薬も嚥まず、病院へも行かずに、小木津教会の司祭館へ出かけて神父に苦痛を訴えたことがあった。日本語は達者だったが、声は人をいたわるあまりか、低くて聞き取りにくかった。その五十年輩のドイツ系アメリカ人の主任司祭は、こんなふうに忠告を与えた。

「何かが不安なのではなくて、ただ不安感があるだけなのですね？」

「ええ、そうです。はい、そうです。理由はありません。あれこれ原因を探してみました」

「漆山さん。ここで」

と指で自分の額を指しながら、

「考えないでください。それは、何の役にも立ちません。あなたの不安感はエモーションです。それは、いまあなたの頭の中ではなく、おなかのあたりにあるのです。何も考えずに、その心の底深く、おなかにあるものと話し合ってみてください。争ってはなりません。コンタクトをとるのです」

と言った。

「声を出して、言ってみてください。考えずに話しかけるのです。私はいま、不安で、あなたがこわい、と。さあ、言ってみてください」

漆山は、誠意を傾け真剣に相談に乗ってくれている神父に、心から感謝した。だが、それは心

療内科で行なわれる自律訓練法に基礎をおいた方法と似ていた。
「不安感は、意志の力では抑えられません。逃げるわけにもいきません。仲よくするしかないのです。でも、助けを求める必要はありません。ただ、存在を認めてやって、話し合うのです。呼んでみるのです。さあ、言ってみてください」
漆山は羞恥にためらうあまり、震える声で二度繰り返し、言った。神父が、安直な精神療法の試みをしているのではないとは、感じとれていた。長年にわたる司祭職にある間に、多くの人々の悩める魂から得た貴重な洞察の言葉と思えた。もしかしたら、神父自らも人間として同じ体験をしていて、苦しんだ経験があるのかもしれなかった。しかし、それにもかかわらず漆山陽三は浅墓な心で、神父の忠告を心理操作の一つと解釈した先入観から、抜けられなかった。不安は消えなかった。
「どうですか？　楽になった気がしませんか？」
「はい。楽になったように思います」
漆山は、感謝の嘘をついた。
「それはよかった。家へ帰ってからも、繰り返してみてくださいね。漆山さん、無理をする必要はありませんが、帰りにお聖堂へ寄ってみてください。わたしは、ね……」
と神父が言った。
「ご聖体の前で跪いているのが好きです。二時間でも三時間でも、じっとそうしていたいと、い

つも思います」

神父の顔に、形容しがたい無垢で、美しい微笑が浮かんでいた。微笑は、一つの愛徳である。漆山は不安感に責めさいなまれながら、神父に嫉妬を覚え、内臓を手づかみにもてあそんでいる不気味な手の感覚を必死に抑えつけ、司祭館を出た。聖堂には、寄らなかった。彼は神の民の偉大な父、アブラハムが〈望み得ないのに、なおも望みつつ信じた〉とパウロが「ロマ書」で教えている信仰の矛盾に耐える力を失っている。「伝道の書」に記されているように〈神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた〉とも考えられなかった。家へ帰ると薬を倍量にして嚥み、芋虫となって寝た。〈愚かなる者は手をつかねて、自分の肉を食う〉。

――漆山の鬱病は心因性のものだった。偽り隠していること、隠しおおせて、耐えるに成功したつもりで実は棘を持ったまま生きながらえている記憶。それとも、あることへの恐れからきている単なるノイローゼであったのに、抗鬱剤を与えられ、薬が生んだ副作用がそれを鬱病に変え、これを治療する薬がまた鬱を誘い出しているのではあるまいか。漆山は、鬱病がもっと重症になれば、情緒反応は消失し、心は枯れ果てて荒漠とした状態になると知っていた。内省力も消える。それからすれば、鬱であるにしても自分の病状はまだ軽度であるはずである。だから、疑いが出る。仮面鬱病。その疑いが、また苦しい。偽りは不安に鞭打たれて、息絶えだえに走り、いつか必ず倒れる。今あるままの自分をつくろうのではなく、なり得るもののために己れを犠牲にする

覚悟が欠けていはしないか。しかし、彼はもつれた頭で自己弁護を試みていた。十七世紀フランスのモラリスト、ラ・ロシュフコォが言っている。破れた心、愛欲の人、軀の傷ついた人が後年、酷薄不気味な言葉を綴った。〈狂気なしに生活する人は、自分の信じているほど賢くはない〉。彼はまた詩人ヴァレリーの言葉を歪曲していた。〈望みは、自己不信と世界を否定する衰弱の精神である〉。

ホリゾンの効果は、現れない。何とかしなければならない。そのとき、不意に電話が鳴り出した。その音は、不安感を急激に募らせた。漆山は、休職して家にこもるようになってから、電話を自分でとらなくなっていた。妻の豊美か子供たちがとり、それが自分宛てのものであっても電話口には出ない。舌がもつれて、うまく喋れない上、混乱して話の辻褄が合わせられなくなっている。電話は六回ばかりコールして、切れた。妻の豊美からではないと分っていた。漆山が出ないことを知っている。時計を見ると、三時になっていた。豊美の帰りが遅い。何をしているのだろう。電話がまた鳴り出した。今度は前より長く鳴って、切れた。もう、我慢がならない。

漆山は病院のダイヤルをまわした。交換が出て、何度か問い返された結果、外来受付にまわった。看護婦に担当の医師の名を告げたが、つかまらず、代わりの医師が出た。ヒルナミン5mgを二錠嚥み、それでも治まらなければ、急患受付に来るように、と言う。漆山は、しつこく震える手で、パネル・パックにはいった錠剤を苦労の末、取り出し、嚥んだ。十五分ばかり待ちかまえていると、不安は薄らぎ眠気がきた。そのころになって、ようやく妻の豊美が帰ってきた。彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com